
お子ちゃ魔王エスロン

ネコスケ・バルサミコス・シ・モンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お子ちゃ魔王エスロン

【Nコード】

N5981N

【作者名】

ネコスケ・バルサミコス・シ・モンド

【あらすじ】

正体不明の侵略者達が世界各地で押し寄せる中
我がシエラルプールは最後の切り札として大昔に
世界を平和に導いた伝説の温厚派の魔王に助力して貰うべく
魔王召還の儀式をしたが全く反応が無く、やはりただの作り話と
誰もが絶望に飲み込まれた数日後、最後の悪足掻きにして
国民全員が戦う事を決め、いざ戦争が始まった直後に
召還儀式の場に誰かが現れたと報告が有った！
ついに魔王が現れたと思っただが……

人物紹介 22年9月14日更新

あ行

ヴァサシユタイナ・リストブルック・シートチャード1世

享年3763892歳 人間年齢 3763歳 魔族

死因、百万年腐らせた人間の死体を食べて食中毒になった

温厚派の魔族を束ねて地上軍&天上軍と共に世界を救った初代魔王
戦後地底に王国を作って残った魔族と移民希望した人間達と天界の
人と

一緒に静かに暮らしていった偉人、腐った肉が好きだが腐らせすぎて
食中毒になってこの世を去った

エスロン・リストブルック・シートチャード3世

4031歳 人間年齢4歳 魔族と元人間のハーフ

地底王国の3代目魔王、まだまだ幼い魔族の幼児だが

血筋のなのか魔法の能力は幼いながらもずば抜けていて博識であり
しつかり者、地底の太陽の異変と地震解決の為に地上に

現れた矢先、ガルトクスの王としての資質を見込んで手を貸す

子供ゆえにすぐ疲れて眠くなったり珍しい物に釣られたりする

従者のファティに絶対の信頼を寄せている

か行

ガルトクス・シエラルプール

45歳 人間

シエラルプール国の現国王、平和主義で争いを好まない為、常に
争いが起こらない様に国内に目を向けている、問題を最小限に
抑える事に余念が無いため少々優柔不断が目立つが国民からの

人望厚く、自身もいざという時の度胸もある

さ行
た行
な行
は行

ハルフィン・リストブルック・シートチャード2世

45937歳 人間年齢45歳 魔族

地底王国の2代目魔王、放浪癖があつて時々人間界へ遊びに行つたある時、レートウティスと仲良くなり色々あつて結婚してエスロンが生まれた、レートウティスと自由気ままに余生を過ごすためにエスロンに英才教育を施してさつさと隠居してしまつた。

実はレートウティスを連れ帰つた時、両親も呆れる程とんでもない小細工をやらかしていたらしい

ファティ・イシュヴィア

18141歳 人間年齢18歳 天使

エスロン専属メイドの天使、生まれた時からエスロンの面倒を見ていてエスロンの事を過剰と言えるほど溺愛していて何においてもエスロンの事を優先させる反面、他の者達には威圧的で容赦が無いため

地底天人の中でも取り分け変人扱いとなつているが本人は開き直つている

周りからはエスロンより魔王に適任と影で思われる

ま行
や行
ら行

レートウティス・リストブルツク

当時20歳 人間

シエラルプールに伝わるおとぎ話に出てくる大昔のお姫様

長い時が経ち、おとぎ話と伝わってきたが事実を元に作られた

お話なので実在の人物である事が分かった、絵本通りなら

魔王に嫁いでそのまま地底に移民していったと思われる

2

レートウティス・リストブルツク

現在41917歳 人間年齢41歳 元人間

地底に連れ帰られた後に魔術によって魔族になった、性格は

温厚で優しく子供好きだが異常なまでにのんびりした性格で

人間時代からとにかくボーっとしている、ほっとけば1日中

寝るのだが、魔族になって生命力などが飛躍的に上がってさらに

エスカレート、昼寝最高記録4百年、就寝1万年などの偉業で

地底ギネス記録になる、エスロンの魔法の素質は何気に母譲り

0話 魔王の伝説と召還（前書き）

どうも、変態ではなく変人のネコスケです。

このたび発投稿の「お子ちゃ魔王エスロン」を目に留まって

オイラは感謝感激雨霞の時雨ナリw

新参者ゆえに誤字など目立つと思いますが許してください

なお、この話は魔王に関する歴史や召還過程が中心の為
やたら長くて退屈されると思いますのでご了承ください

0話 魔王の伝説と召還

私はシエラルブル国の国王ガルトクス、この研究日誌は

今は忘れつつある魔王を召還する為の資料を探している過程で偶然に見つけた物で、世界各地に残された魔王に関する伝説の中でも初めて魔王が現れた記録が残された大変貴重な歴史書であった。

かなり痛んでいて今にも崩れそうだったので慎重に扱ってかなりの時間を費やしたが何とかある程度書き写す事ができた。

しかも驚く事に今は忘れつつあった魔族に関する事も記されていた。その書かれていた歴史の内容は次のページを見て欲しい

神聖魔連合大戦

かつて遠い大昔にこの世界は悪しき魔族が世界の端の地に集まりやがて世界を支配しようとする侵略を始めた。

平和を求める聖王はそれに対抗すべく人間や同じ志を持つ地上の各民族と天上の神様と天使達が立ち向かいました。

しかし……悪しき魔族達の力は恐ろしく強く、各地の地上軍と天上軍は

次々と返り討ちにされ、やがて世界の7割は魔族に支配されていた。戦力の分散は不利と理解し、神と人間の聖王はある大陸に各地の地上軍と

天上軍を集めて拠点となる城を建て魔族達を倒す準備を進めていた。ある時、とうとう悪しき魔族達が拠点の地にまで迫ってきて地上と天上の軍は迎え撃ちました。

前衛の軍隊が魔族軍と戦う途中、前衛の軍と城から後方援護する後衛の軍の中心に何の前触れも無く魔族の軍勢が現れ、地上と天上の軍は

魔族軍に挟み撃ちされたと思った…その時、突然現れた魔族の軍は

悪しき魔族軍とは別の旗を掲げて地上と天上の軍を無視し
悪しき魔族の軍勢と戦い始めました。

地上と天上の軍は混乱の色に染まるがこれを好機と気づいてすぐに
戦いを再開しました。

突然の同族からの攻撃に戸惑った悪しき魔族軍は総崩れになり

大陸から撤退していき地上と天上の軍は初めての勝利に喜びました。

天上の神と地上の聖王は突然現れた魔族達の代表である

魔王ヴァサシユタイナ・リストブルック・シートチャードに

対面の場を開いて欲しいと頼まれ、魔王軍は自分達の事を話した。

聞けば自分達は争いを拒み平和を求める温厚派の魔族であり

侵略派の魔族達に逆らった為に襲われたが温厚派魔族の中でも飛び
ぬけて

力が強いヴァサシユタイナ達のおかげで最小限の被害で生き延びた。

故郷の地から逃げた魔族達は偶然にも地上と天上の軍の拠点に

なる前のこの大陸の地下に地底王国を築いていた。

この大陸に人々が集まって魔族軍と戦う準備をしているのを

聞いたヴァサシユタイナは平和の為に自分達も戦う事を皆に

呼びかけて密かに準備していた。

お互いを理解しあつた3軍は協力して悪しき魔族達を倒す事を

決意し、神聖魔連合軍を結成した。

この日から神聖魔連合軍は各地の小規模の魔族軍を次々と潰してい

支配されていた各地を開放していきました。

最初は小さな反撃であつたが、各地の魔族軍に囚われていた者

逃げて生き延びていた者、生き残って戦っていた者達を救い

気づけば大反撃ができるほどの戦力が集まっていき世界を

9割も取り戻し、そしてついには神聖魔連合軍は魔族軍を滅ぼし

世界に平和をもたらした。

平和が訪れた日から人々は5日も祭を開いて祝い、楽しんだが

祭が終わると3つの種族はそれぞれの故郷に移民を希望する者と

共に帰って行った。

神の天界には天人と天人に恋した人間が移民して行き
聖王の地上には人間に恋した天人が移民していったが
魔王の地底に魔族は全員帰って行き、人間と天人が移民した。
魔族達は自分達の力は3種族の中でも取り分け強力なので長い
平和の中で悪しき心を持った魔族が生まれ戦争などの
引き金になる可能性がある、魔王は戦争の前に魔族達に
言い聞かせていたので魔族達は移民を許されず、魔族達も
それを理解していた。
よって魔族と恋に落ちたり友情を深めた人間達や天人は家族や
友人と別れながらも地底に移民していった。

現在書き写せたのはここまでである、しかし長い間歴史の研究者が
頭を悩ませていた「魔族はなぜ地上と天界から姿を消した」謎が
偶然にも解った事は世界に賞賛されるほどの大発見である
しかし…今はこの事を発表する余裕などが無いのが残念だ…
各地で暴れている正体不明の侵略者達がこのシエラルプールの
近くまでやって来たのだから私は名残惜しくもこの歴史書を
大事に保管し、私は引き続き魔王の召還方法を調べる事にした。

とうとう見つけた！魔王を召還する方法とその過程で前のページに
記録した歴史書とは別にさらにとんでもない事実が分かってしまっ
た！

大昔だが我がシエラルプールには魔王と関わりが有り、魔王にこの
シエラルプールを救われたいた事と、おとぎ話と伝わっていた
絵本の「魔王とお姫様」が本当の話であった事である。

我がシエラルプール王家の昔の家系図が見つかってそれを従者の者が
見ている時ある名前に目が留まった、「レートウティス」と言う名に
従者はその名前を思い出そうとするとすぐに思い出し従者が
慌てて謁見中の私の所に駆け込んで来た時は凄く印象に残った。

私もその家系図を見て驚いたのだ、レートウティスは絵本の「魔王とお姫様」の中に出てくるお姫様の名前で家系図にも魔王に嫁いだと記録が有ったのだ！…何か水分を落としたのか少しインクが滲んでいたのだが。

私はやはり魔王は実在すると確信して改めて気合が入ったその家系図があつた近くにさらに何かあるのではと引き続き従者達に探させるとまた従者が慌てて駆け込んで来た。

予断だがこの時私は入浴しよう着替えてたので恥ずかしかった／＼

…予想道理想家系図の近くにはなんと魔王が残した召還の術式が書かれた本が見つかったのだ、何重にも木箱に包まれていてさらに布を何重にも巻かれたので少々痛んでるが保存状態が極めてよかつた。

さつそくその本を調べると魔王は再び世界に危機が迫った時の為に自分達魔王軍を呼べるように何冊か残していたらしい、私は後世の為ににも気にかけていた魔王に尊敬し始めていたが肝心の召還方法のページを見ている途中で変な事が書かれていた。

召還の術式・魔力量・そして材料が記されていたのだ、普通は召還する時、術式と召還する者に見合う魔力量だけで十分だが極稀に召還する時に代償として宝石や武具などを捧げるが魔王の捧げ物は「腐った肉」である。

非常に理解ができないが私はすぐに召還の準備を始めた。

（ここからは字が力無く乱れているが皆様には正常に読めるように清書フィルターをかけています。）

……ついに召還の儀式を始めたが失敗に終わった…もはやこの研究日誌を書く意味が無いのだが一様最後まで書くことにする。召還方法が分かった3日後、ついに召還の儀式を始めることができた。

術式や魔力量などはすぐに準備できたがやはり腐った肉を捜すのに苦労した、肉を腐らせようにもすぐに腐るわけもなく皆が頭を悩ませていたがある衛兵の奥さんが話の種に買いだめた肉が腐って処分が大変だったと話したところ衛兵はすぐに奥さんを引っ張って国外に捨てた穴を探して掘り起こて朝早くに城へ駆け込んで来た。城内は悪臭に包まれたがともかく召還の儀式を始める事にした。

術式を書き、腐った肉を術式の中心に置き、魔力を注いで呪文を唱えた、術式が光り輝き捧げた腐った肉は姿を消していた私達は召還に成功したと喜び、魔王が現れるのを待った。

捧げ物を使った召還は先に捧げ物を相手に贈り、それに気づいた相手は召還先を辿って儀式の場に現れるという事になっているので普通の召還と違い時間がかかる場合があるのが欠点であるが私達は少し位は仕方ないと思い、今か今かと待ち続けた。

しかし結局魔王は現れなかった。最初の儀式から1日立っても反応が無く失敗したと思い原因を調べた、術式に何らかのミスがあった。

別の所に送ってしまったのか？記された魔力量の単位が違っていた？などの結論が出たが術式や魔力量も問題は全く無かった。

もしや腐った肉が臭くて鼻をつまんで詠唱してたからちゃんと詠唱できてなかった？捧げ物の腐った肉に土などの不純物が混ざってた事に魔王が腹を立てたのか？と馬鹿げた結論も出たが一樣思いつく限りの事をして見たが結局は失敗に終わった。

これほど皆に苦労をかけたのに何一つ得られずに全ては無駄の2文字で終わるとは。やはり魔王は作り話なのだと言う声も上がっていた。私も途中、心のどこかでそう思っていたのだろう。もはや我々には滅びの道しか無いのか？侵略軍はもうすぐ側まで迫って来ている、私はこの研究を止めて侵略軍を迎え打つ事にした。

ガルトクス「……魔王軍だけに戦わせる訳には行かないと思いつてもできるだけ手伝えるように準備しておいて幸いだな……」

「陛下：もうその事はお忘れください：確かに失敗には
終わりましたが交戦中の兵士達を始め、国民も城内で
いざという時自分達も戦おうと準備をしているのです
兵士や国民に避難を勧めていたにもかかわらずに殆どは
こうして残り、戦っているのも陛下の人望の賜物です」

大臣の言うとおり国民の殆どは残りできる限りの準備をしている
武装して素振りなどする者や、食料を用意してる者などの姿は
沈んでいた国王の覇気を取り戻していた

ガルトクス「……大臣の言う通りだな、あれだけの失態を見せても
こうして私の為に皆が頑張っているのに私が落ち込んでいては皆に
顔向けができません！私はシエラルブル国王ガルトクス！！

居もしない魔王になど頼らず、たとえ私一人だけしか戦えぬ
事になってもこのシエラルブルを救って見せよう！！」

「それこそが代々伝わる国王の姿です！」

ガルトクス「大臣すぐに前衛軍に連絡するのだ！城まで一時撤退し
城の兵器を使いながら兵士と国民とで侵略軍を討つ！私も出る！」

「承知いたしました、すぐに連絡を……」

「キユイイイイイイイイイン！！」

ガルトクス「なっなんだこの光は！？」

覚悟決め侵略軍と討伐に向かおうとしたが突然眩い光が城の
中庭から出現して国王と大臣は目がくらむ、光が収まり始めた時
城に居た国民が駆け上がってきた

「王様！魔王の召還儀式の場に魔族らしき者と天人が召還されまし
た！」

ガルトクス「なっなんと！本当に魔王は存在していたのか！？」

「しかしなぜ天人も一緒に召還されたのでしょうか？」

ガルトクス「おそらく歴史書の通りだとすれば移民した天人の子孫で魔王の従者であろう、とつとにかく助力を頼もう！

魔王に頼らないと決めればかりだができるだけ犠牲は抑えたい！」

「そっそうですな！すぐに参りましょう！」

「あつあの召還された魔族は！」

国民が何か伝えようとしたが慌てた2人は中庭の方へ急いだ為その声は虚しくその場に響くだけであった、中庭に向かった2人は中庭に続く道の先で儀式の場に2人の人影を視界に収めたそして中庭にでるとそこには……

エスロン「ファティここが地上？なんか空気が殺気に満ちてるし火薬とかの匂いがいっぱいだけども間違えちゃったかな？」

ファティ「おそらく地上に間違いは無いと思いますがそれにしてもなんて汚らわしい空気なこと、魔王様の繊細な御身体には毒です！」
エスロン「あれ？あそこに人間がいるよ、ちょっとここで何があつたか聞いてみるね」

ファティ「いけません魔王様！！人攫いかもしれませんのでこのファティが聞きますので私の後ろにいてください」

…報告に来た国民の言う通り、儀式の場には魔族の特徴である青い肌に小さいが角が生えていた、しかし目の前にいるのは…

ファティ「その人間！一体この地で何が起こつたか答えよ！」

天人とその天人の足元に隠れてこちらを見ている魔族の幼児であった

0話 魔王の伝説と召還（後書き）

魔王系小説を書かれているある2人に刺激され
自身も魔王系小説を書きました。

1話 お子ちゃ魔王の力

ファティ「その人間！今何が起こってるのか述べよと言っておるのが聞こえんのか！？」

エスロン「ねえファティ…そんなに怒鳴ってるから人間が怖がって喋れないんじゃないの？」

ファティ「なるほど流石魔王様、しかし地上の人間はここまで腰抜けとは…」

なんだろう…とガルトクスと大臣が思うのも無理は無い、地上にも天人がいるし変わり者の

天人だっているのだがここまで口が悪くて威圧的な天人は今まで見た事が無い、この天人が

魔王なのかと思ったのだが足元の小さな魔族を魔王と呼ぶのだからその答えは間違いと分かる

それでも頭では理解してるのだがどうしてもこの小さな魔族を魔王として見れないのである

エスロン「ねえおじさん達、この地で一体何があったの？もしかして戦争？」

ファティ「戦争ですと！？魔王様危険です！今すぐにこの場から避難しましょう！！」

エスロン「あ！ちょっとちょっと待ってよファティ！！」

確かに戦争の真っ最中だがファティと呼ばれた天人はエスロンという幼児魔族を抱えて

今すぐにでも飛び立とうと羽を広げる途中で我に返ったガルトクスはすぐに呼び止めた

ガルトクス「まつ待つてくれ！そなた達は地底に住む魔王とその従者か！？」

ファティ「その通りだ、このお方はエスロン・リストブルック・シートチャード3世

現代の魔王様だ！私達は急ぎの用事があるからもう行くぞ」

「お待ちください！我々はとても困っているのです、どうか……」

ファティ「貴様等の問題など私達には関係の無い事だ！貴様等の手で解決しろ！！」

エスロン「ファティ、話だけでも聞いてあげようよ」

ファティ「流石魔王様！こんな人間の言葉にも耳を傾けるとはなんと慈悲深い！！

このファティはかんぷくしました というわけで人間さっさと話せ！！」

本当にこの天人は天人なんだろうが悩むがガルトクスは正体不明の侵略者達と

交戦中で戦況は不利と言う事を伝えて力を貸して欲しいと頼んだが天人の反応は

ファティ「この愚か者！！魔王と言えど幼い子供を戦争に利用しようと言うのか！？

魔王様、いや子供の手を血に染めると言うのか！？貴様等の人徳はどうなつておる！？」

「そつそれは…確かにあなたの言う通りですが…我々にはガルトクス「大臣止めよ！」

「陛下しかし！」

ガルトクス「その天人の言う通り子供にさせる事ではない、いかに力があるとはいえ

血生臭い惨劇の場は子供には必要の無い事だ……私が間違っていたのだ……」

エスロン「……………」

ガルトクス「私は魔王の手を借りずともこの国を救うと誓ったばかりだ！！それなのに

魔王が現れた事でその気持ちを忘れてしまった私は不甲斐無い！！」

「陛下……………」

ガルトクス「呼び止めてしまつてすまなかつた、戦場は北西の方角で起こっている反対の

南東には港町がある、もしもの為の船がまだ残っている筈だ、それで逃げるの良い」

ファティ「……………阿呆、私も魔王様も空を飛べる、いらぬ気遣いだ…だがその気遣いは感謝する」

いままで厳しい顔しかしてなかつたファティは礼を言う一瞬だけその表情を緩めた

そして今まで黙っていたエスロンはその口を開いて驚く事を言った

エスロン「戦場は北西だね？ファティ戦場に行くよ」

ガルトクス「なつなんと！」

ファティ「まつ魔王様なりませぬ！！あなたは魔王といえどまだ幼い子供です！

戦いの世界とは無縁で良いんです！お考え直して…」

エスロン「でも僕は魔族の王様だよ！王様は困った人、弱い人を守らないといけないんだよ！

僕はおじいちゃまの様な魔王になるって決めていたんだもん！おじいちゃまは関係の無い

地上と天界の人達を命を懸けて助けて世界を救ったんだよ！僕はおじいちゃまみたいに強くないから

この人達を助けられないかもしれないけど僕はおじいちゃまの様な強くて優しい心を持ちたい！！」

ガルトクス「幼いとはいえなんと立派な……………」

幼児であるエスロンの決意の前にガルトクスを始め、大臣や近くにいた国民達も

感動に胸を打たれているいる中であるが…

ファティ「ご立派御座います魔王様あああああああああああああああああああ
ああああ！！

このファティは死する時までお供いたしますよおおおおおお！！
いざ初陣へ！！」

エスロン「ファティ顔拭いて、涙と鼻が掛かる……」

感動の場をぶち壊しつつもファティはエスロンを抱えてそのまま戦場の方まで

走り去って行った、残されたガルトクスと大臣は気を持ち直してすぐに戦場に向かった

ガルトクスと大臣が外へ出ると既に居たファティとエスロンが2人を待っていた

ファティ「遅いぞこの鈍間！」

「はあ…はあ…あなたがいきなり走ったんでしよう！！」

ガルトクス「止めよ大臣」

エスロン「ファティもだよ、話が進まないよ」

ファティ「もっ申し訳ありません魔王様！」

「失礼しました…」

エスロン「それより現状説明してください、今こっちの方に人間達が来てるけど

負けてこっちに逃げてきているの？」

「いえ、中庭に向かう前に通信で城の兵器を利用しながら侵略軍を討つ為に

我が軍を城まで撤退させたんです」

エスロン「なるほど…念の為に聞くけどあの緑の大きい人達は敵だよね？」

ガルトクス「ああ…間違いなく敵軍だ……」

エスロンが指差す先には撤退しているシエラルプール兵思われる人間と天人に

地上の様々な獣人達などが見える中、その後ろには緑の肌に遠めでも2メートルは

あるのがわかる巨体の侵略軍の姿が有った、ごついし顔も怖いから正直気色悪い

ファティ「なんと醜悪で醜い姿…魔王様のくりつとした御目々が汚れる！！」

エスロン「僕も近くで見るのはやだ…ファティ、使っちゃダメって言うってた

あの闇の魔法を使っても良いかな？現状では一番正確に狙えるし…」

ファティ「承知いたしました、ですが今回だけですよ」

エスロン「うん…」

エスロンは自分の羽で10メートルほど空に飛び立つと目を閉じて詠唱を始めた、何かの魔法で侵略軍を先制攻撃して足止めをするのだと

ガルトクスと大臣はそう思ったが上空から急に寒気が放たれた

上を見ればエスロンの周りに黒い霧の様な物が漂いその黒い霧は

さらに上空へと上ると霧は太陽を背にして影を生み侵略軍だけを覆う

エスロン「孤独なる闇に残された死者達よ、光から見放され影の上に立つ者達は

彷徨う君達の仲間である、さあ今すぐに迎えに行きこの世から連れ

出してあげて」

エスロンが詠唱を唱え終わると侵略軍の行進が突然止まった

ガルトクス「なんだ？敵軍が全員止まって…いや転んだぞ！」

「いえ！なんだか様子が変です！？これは一体…！」

「うわあああああああ！！！」

何が起こったか遠目では分からなかったが近くまで撤退していた前衛軍はその場を見れたのか急に悲鳴を上げている

「てっ敵軍が捕まった！！俺等も捕まるのか！？」

「なんなんだこれは！？魔法か！？こんな魔法が存在するの！？」

「につ逃げる巻き込まれるぞ！！！」

その惨劇に恐怖した兵士達は急いで城まで戻っていった、逃げてきた兵士達は

ガルトクスに避難するように伝えるがガルトクスは何があつたか問いただした

「国王お逃げください！あれはやばすぎます！この世の地獄です！！」

ガルトクス「落ち着け！一体何が起こつたのだ！？」

「急に侵略軍が影に覆われたと思つたら突然転んだんですがただ転んだんでは無いのです！」

影から手が現れて侵略軍を捕らえて影の中に無理やり引きずり込んでいったんです！！」

ガルトクス「なんだと！？そこをどいてくれ！！」

「王！危険ですお止めください！！！」

ガルトクスは兵士達の制止を聞かずに兵士達の中を掻き分けてその場までたどり着くと

先ほどの話通り、侵略軍は影から現れた手に捕らえられて引きずり込まれていた

侵略軍は必死にもがいて脱出しようとしているがその分手が増えてさらに引きずり込む

侵略軍の殆どは下半身が埋まり、中には腕や首だけ影から出ている者もいる

ガルトクスはこの光景に言葉が詰まった…その次の瞬間

「ぐっぐぎゃあああああ！！グバアッ！」

「ブシュシュ！！ブチィィ！！」

ガルトクス「……………え？……………」

「……………ッ！？？」

「グシャッ！ブッシュュー！！」

「ゴキゴキゴキ！！グシャ！！」

ガルトクスと兵士達の目の前はまさにこの世の地獄と呼べる程の光景になった

影に捕らわれた侵略軍は次々と影から出た部分から切り離されて宙を舞う

上半身・腕・手・首・顔の半分などが血潮を散らしながら宙を舞うのだ、正常な

人間ならまずこの光景耐えられる筈が無い、事実兵士達の殆どはこの惨劇に

腰を抜かして失禁して震えてたり嘔吐して崩れ落ちる者がいる、恐怖によって気絶して

いる者はまだこの惨劇を見る時間が少ない分運が良い方であろう、その中ガルトクスは

思考が凍りついているがこの惨劇を前にしても立っただけあっ

て賞賛に値する

「ファティ「流石魔王様！華麗に一瞬で決着をつけましたね」
「エスロン」でも…気持ち悪くてついこの魔法は使っちゃったけど…
止めとけばよかった…おじさん達凄く怖がってる………」

既に降りてきてこちらを心配してる目でこちらを見ているのだが私達は

この幼児が間違いなく魔王であることを脳裏に焼き付ける思いで確信した

2話 地底の現状と旅立ち

ファティ「まったく硬い椅子、魔王様の柔らかく整ったお尻を痛めてしまう、魔王様このファティの膝にお座りください」

エスロン「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

ファティ「いえ魔王様！こんな安物の椅子に座るくらいなら立っているほうがマシです！ですが立つたままではお疲れになられるでしょう、ですから私のお膝に座っていてください」

エスロン「（何言つてもダメみたい…）わかったよ…」

ファティ「はい、では膝へ」

ガルトクス（その椅子一様：最高級の一品なんだが…）

「あの魔王エスロンさんファティさん：色々お聞きしたい事があるのでお食事しながらでもお願いできますか？」

エスロン「良いよ、僕もあの緑の地上人の事が気になるの」

あの惨劇の後エスロンやガルトクス達は一度城に戻って

疲れを癒す為に休むことにしたのだが殆どは精神的な

疲労にて寝込んでおり城の医務室に収まりきらない状態である

一息ついた所で大臣はエスロンに緑の人種やなぜ地上に

現れたことなどを聞くべく質問を始めた

ファティ「何？あの醜い奴は地上の者ではない？」

ガルトクス「ああ、少なくともあのような人種は今まで

見た事が無い…全くの新種としか思えないのだ」

「見た所魔族に少し似ている特長があります、何か心当たりは無いでしょうか？例えば突然変異の亜種とか」

ファティ「確かに魔族に似た感じがあるが私は見た事無い

兵士達の報告書を見れば確かに再生力と魔力耐性はある様だが魔王様を初め、一般魔族に比べても能力はかなり劣る」

エスロン「うん、魔族の色んなハーフはいるけどあんなのは見た事も無いし魔族は全員地上には勝手に出られないんだ勝手にしようとしても地上までの移動魔法は代々の魔王と近親者、それ以外ではファティみたいに信頼された直属の重役だけしか知らないんだ」

ガルトクス「そうか…：そういえば何故あなた方は地上に？私達は魔王を召還しようとは度も召還儀式をしたんですが数日立つても何の反応が無かったのだが何かあったのか？」
エスロン「召還儀式？…：もしかして腐った肉を使った？」

エスロンとファティは何か思うことがあるのか表情を歪める

ガルトクス「使ったが…：やはりまずかったのか？…：」

エスロン「ううん、初代魔王だったおじいちゃまの好物は腐った肉でちゃんと正しく召還儀式はできていたよ…：ただ…：」
ファティ「処分に大変迷惑したのだ」

「それは…：知らずとはいえ大変なことを…：」

ファティ「その通りだ！ただでさえ地底には死活問題が発生しているのに余計な事を起こしおつて！」

「ひあつ！！」

よほど切羽詰った問題があるのか食って掛かるが膝のエスロンは必死に押して止めようとしている

エスロン「ファティ駄目だよ！魔族の中でも飛びぬけて悪食のおじいちゃまも悪いんだよ、おじさん達だって国を救おうと必死だったんだから許してあげようよ、それに僕達は旅に出るために地上に来たんだからそろそろ行こうよ」

ファティ「そつそういえばそうでした…：御優しい限りです魔王様、確かに私達には大事な用事があるから早々に

「ここを立ち去りましょう」

今にも暴れそうなファティにエスロンは本来の目的を
思い出させて上手く怒りを抑えた

ガルトクス「そういえばどうして二人は地上に来られたのかな？
良ければ話して貰えるだろうか？」

ファティ「話を聞いていたのか？私達は急ぎの旅の途中だ
貴様等に話してる暇はない！」

エスロン「実は地底では凄く困った事が起きてるの、それで
地上の一番高い山まで調べる事になったの」

ファティ「その為に魔王様は父上である先代魔王の命を受け
不本意ながら地上まで登ってきたのだ」

（急ぎの旅ではなかったのですか…）

さっきまで急ぎの旅と言って今にでも出発しそうだったのに
エスロンが説明し始めたとたん急に態度を変える

ガルトクス「一番高い山…ロレートル山か、そこに地底と
何が関係しているのだ？」

エスロン「その山には地底に太陽の光を送る地底の秘宝が
あるんだ、その秘宝に何かがあったみたいで太陽の光が
送られなくなつて地底が真っ暗になつちやつたんだ」

ファティ「亡き初代魔王様がお作りになった秘宝、吸陽石の
おかげで地底にも昼と夜が入れ替わつて、我々も地上の様に
生活でき、作物も育てられるのだ」

エスロン「もしこのまま太陽の光が届かなかつたら地底は
生活リズムがめちゃくちゃ、作物も育たたずいずれ食糧危機で
地底の皆は餓死しちゃうかもしれないだ。」

ガルトクス「そうなのか…ところでなぜヴァサシユタイナ魔王は

来なかったのだ？」

エスロン「おじいちゃまはもう死んじゃったんだ…100万年腐らせた人間の肉を食べて食中毒で死んだの……」

意外と情けない死因でこの場に深い沈黙が包み込む、「冗談かと思っただがファティも渋い顔してエスロンを撫でている

エスロン「まったく…いくら腐った肉が好きだからってものには限度つてもものがあるのに食べたから…人間は死んだばかりの新鮮な御刺身が美味しいのに」

ガルトクス（魔族は死んだ人間の肉を食べると言う話は本当だったのか）

「そういう問題ではないのでは？」

ファティ「んん！？」

「なんでもありません……」

少々ずれた感想を述べるエスロンに大臣はボソツと疑問を言うがファティには聞こえてたようで睨まれて身を縮める

エスロン「話が脱線しちゃったね、とにかく僕達はすぐにでもロレートル山行って吸陽石を調べないと…食料もそうだけどもママは気づかないで何百年でも寝ちゃいそうだし僕だってまだ山ほどサインや判子を入れなきゃいけない書類があるんだ…」

ファティ「それなのに先代魔王はまだ幼い魔王様に魔王の座を押し付けた挙句に自分はさっさと隠居、しかも今回の吸陽石の異変を調べると命令したくせにその書類等も自分でやれと…」

エスロン「自分が魔王時代にサボりまくった書類だつてまだ残ってるのにそれも僕がやれなんて酷いよ…今度おばあちゃんに言いつけてやるもん！！」

ファティ「それより先代王妃様に叱って貰った方が有効かと

先代魔王は王妃様に骨抜きですから」

地底の2代目魔王の寝室

レートウティス「ZZZZZ＼ZZZZZ＼ZZZZZ」

2代目魔王妃レートウティス、2代目魔王ハルフィンのお奥さんでありエスロンの母親でもある、4万年ほど前に地底まで嫁いで来た2人の馴れ初めは絵本になり、現代ではお芝居にまでなっているほど根強い人気を誇るのだがどんな美談にも話せないような裏話があるもの。その一つが魔王妃レートウティスの性格、とんでもなくのんびりして行動が遅く、反応が鈍い事で何もしなくても問題を起こしてしまう。現に今は自称昼寝から3年ほどずっと寝ているのである。

ハルフィン「今日も良く寝てるな。早く起きて天界にでもデートに行こうよハニ」

2代目魔王ハルフィン・リストブルック・シートチャード2世放浪癖があり、地上へ行く魔法を覚えてから地上のアッチコッチ行ってたびたび地底王国を騒がせた、ある日後の妻であるレートウティスと出会い一目惚れ、絵本通りの馴れ初めとなるが地底にレートウティスを連れて帰った直後でとんでもない秘密を隠していて両親を驚愕させたり、レートウティスと遊んで暮らす為に子供が生まれたら英才教育を施してとつと引退するつもりでいて事実、3年前レートウティスが昼寝直後に無理やり魔王の座を譲るとんでもない父親でエスロンとファティに恨みを買っている。その証拠に……

エスロン「じゃあ両方採用って事で、ママとおばあちゃまがパパを御仕置きしてるとさくさに紛れて僕達も加わろう！」

ファティ「是非ともそうしましょう！先代魔王は初代魔王様に似てちよつとやそつとでは死なないから思いっきりやりましょう！」

引退したとはいえ仮にも王国の最高権力者でもあり実の父親相手に起こそうとする行動ではないのに本人達は日頃の恨みをはらそうと盛り上がっている

エスロン「えとえと！おじいちゃまが死ぬ前にくれた……」

ファティ「あれは絶対駄目です！！ついでに2番目から20番目までの魔法も使わないでください！凄く危険ですから……」

エスロン「えくおばあちゃまが教えてくれた取って置きの……」

ファティ「ダ・メ・で・す！！言う事聞かないとお尻叩きますよ！」
エスロン「ううう……わかった……」

普段はエスロンにとても甘いファティもよほど危険な魔法なのか20番目以上の魔法を堅く禁止している、余談だが前に一度17番目の魔法を試し撃ちをしてしまい地底の開拓地を焦土に変えてしまった事があつた為、エスロンと危険な2く20番目の魔法を教えた初代魔王妃も一緒にファティとレートウティスにそれぞれお尻叩きをされてしまった事は新聞の一面にもなっていないまだに有名な大事件である

ファティ「ご理解していただければ良いんです魔王様」

ガルトクス「さつき使った魔法はその魔法の1つなのか？」

エスロン「ううん、あれは魔術書で覚えた戦闘用闇魔法のほんの基本魔法だよ、おばあちゃまが教えてくれた魔法は一番弱いのも小さな島を消しちゃうくらい強力なんだよガルトクス「なんと！」

「あんな強力な魔法を上回るのでですか!？」

ガルトクスは戦場で使った魔法もその禁止魔法の1つなのか
気になって問いかけるのだったが戦場で使った地獄絵図の
魔法ですら大した事無いように言って除けるエスロンに
大臣共々驚愕する

ファティ「独学で覚えた魔法の中でもあの魔法は魔王様にとって
初級部類に入るのです、しかし闇の魔法は威力がある反面、その
リスクも高いのだ、魔王様の實力なら心配ないのですがなるべく
禁止しているのです、私はこれでも常人範囲では上位に位置する
程の魔法を嗜んでいるが魔王様の基本にも及ばない…まだ4千歳の
若さで魔王の座に就き、3界でも最強クラスの魔術を嗜んでるのは
魔王様が優れた才能の努力家であるためだ」

エスロン「ファティ褒め過ぎだよ／＼／僕なんかまだまだだよ、
死んだ

おじいちゃまは武術も凄かったし、おばあちゃまは僕の知らない
魔法がまだいっぱい知ってるし、天界の神様だって自然の魔法が
凄く安定しているし、パパはなんだかんだで本気になるとなんでも
できるからね…その才能をもっと国の為に使えば良いけど……」

エスロンは謙遜するがファティの言ってる事は紛れも無い
事実である、幸か不幸か先代魔王に引退目的とはいえ
物心ついてすぐに英才教育を施された為、魔法の技術は
5本指に入るのである

ファティ「まったくです！この間は魔王妃様に綺麗なティアラを
作るとか何とか言って3界の金銀宝石類と魔法薬を適当にごちゃ
混ぜにして錬金魔術を実行したにもかかわらず成功しましたね」

「その錬金魔術と言うのはそんなに難しいのですか？」

エスロン「難しいよ、たった一滴の薬の量の違いでも失敗するし
材料と薬によっては正しい順番や分量、熱し方とか色々注意して

気をつけないと拒絶反応起こして簡単に大爆発しちゃう程危険で
錬金内容によつては技術免許だつて必要なんだよ、それなのに
僕の研究室に勝手に入つて貴重な薬や材料と道具を使ってパパは
やった事の無い錬金魔術を成功させるんだもん、立場無いよ……」
ファティ「しかも凄く綺麗なテイアラでしたね……」

エスロン「……思い出したら腹が立つてきたよ、ファティ
いい加減もう行こう、早く異変を解決して地底に帰つて仕事とか
片付けないといけないし、食料も限りがあるから時間も無いよ」
ファティ「そうですね、あの醜い生物の事は気になりますが
先を急ぎましょう、兵士に世界地図とコンパスを用意させました
のでもすぐに出発できます」

エスロン「それじゃあ行こうよ、おじさん達僕達もう行くね」
ガルトクス「ああちよつと待ちなさい!!」

エスロン「ん?どうしたの?」
ガルトクス「直接ロレートル山に行くのは自殺行為だもつとすぐ
日も暮れるから山に行くのは止めた方が良い」

ファティ「日が暮れる位問題は無い、だがなぜ山に直接
行くのは自殺行為なのだ?」

魔王の実力を目の当たりにしたにもかかわらず危険だと
忠告するガルトクスに流石のファティも気になっている

ガルトクス「ロレートル山は世界一高い山だけあつて気流が
激しく乱れており、空を飛んでいけば飲み込まれてどんな
所に飛ばされるかわからない、鋭く突き出した岩が所々に
生えているから串刺しになつた者も数十名に上る」

「さらに山の周辺は雷雲が発生してとても近づけない
地道に徒歩で山まで近づいて上るしかないのです」

エスロン「それじゃあとても飛んでいけないね、じゃあ
今日は山の近くの町まで行つて山登りの準備をしようよ」

ファティ「地図によりますとサラマンダー国という王国が一番近いですね、この距離なら夜までに着けます」
ガルトクス「サラマンダー国か……」

何か気になる事があるのかガルトクスはうつむいている

ファティ「どんな国なんだ？」

「あの国のお姫様はプライドが高くとても好戦的なんです」
ガルトクス「それに珍しいものや騒がしい事が大好きな性格で両親も手に負えない程なのだ、あなた方が魔王とその従者と知れたら面倒な事になるはず、なるべく目立たないように行動して山に向かうと良い」

エスロン「パパ以外に面倒な王族がいるなんて信じられないな……ただでさえ魔族の僕は青肌だから目立つから何か上着で肌を隠した方が良いね、あとファティ」

ファティ「何ですか？」

エスロン「魔王様と呼ぶのも止めて名前と呼んでね、魔王と呼ばれたらそのお姫様に追いかけられるかもしれないし、信じて貰えなくても頭の可笑しい人に見られるかもしれないから」

ファティ「承知いたしました魔王……いえ！エスロン様」

（魔王エスロンは幼いがしっかりしていて大丈夫だろうが問題はファティさんが暴走しないといいのだけれど……）

ガルトクス（それにしてもこんなに幼い子供に魔王の座を押し付けるなんてとんでもない父親だな……よく非行少年にならず良い子に育ったものだ）

そんなわけで色々話が脱線しまくったりしたが次の行き先が決まりエスロンとファティは今日中にサラマンダー国に向かう事にしたしかしサラマンダー国のお姫様と対面フラグが立っていることは知る良しも無い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5981n/>

お子ちゃ魔王エスロン

2010年10月11日23時14分発行